



右：「女虚無僧」江戸時代 日本民藝館蔵 柳宗悦が蒐集した大津絵
上：日仏会館での大津絵国際シンポジウムの展示と講演風景

大津絵国際シンポジウム講演内容 2016年7月8・9日

- 横谷賢一郎(大津市歴史博物館)「大津絵の世界 ―キャラクター絵画の成立―」
- 鈴木堅弘(京都精華大学)「大津絵ともう一人の浮世又兵衛 ―大津絵起源説再考―」
- 白土慎太郎(日本民藝館)「柳宗悦が見た大津絵」
- 矢島新(跡見学園女子大学)「素朴絵としての大津絵」
- ポール・ベリー(関西外国語大学)「明治・大正時代における大津絵テーマ」
- 佐藤信(実践女子大学文芸資料研究所)「江戸文学のなかの大津絵」
- 小林優(足立区立郷土博物館)「河鍋晩斎と大津絵のキャラクターたち ―本画から錦絵、春画まで―」
- 植田彩芳子(京都文化博物館)「近代京都画壇と大津絵 小川千甕《西洋風俗大津絵》を中心に」
- 嶋田華子(美術史研究家)「梅原龍三郎と大津絵コレクション―素朴絵を求めて―」
- クリストフ・マルケ「20世紀前半における大津絵の再発見と創作 ―楠瀬日年からフェリックス・ティコティン、アンドレ・ルロワ＝グーランまで―」
- リカル・ブル(バルセロナ自治大学)「カタルーニャにおける大津絵 ―エウダル・セーラ、セルソ・ゴミス、ジョアン・ミロ―」 (発表順・敬称略)



特集2

大津絵を世界へ

対談

尾久彰三

×

クリストフ・マルケ

去る七月八、九日、東京・恵比寿の日仏会館にて、初の国際シンポジウム「大津絵を読み解く…街道絵師からミロまで」が開催され、会場はロビーのモニターで聴講する人もでたほどの盛況となった。また、同日に日仏会館内ギャラリーで五一点の大津絵が展示されたほか、連動企画として、日本民藝館、國學院大學美術館でも関連展示が行われた。

本稿では、シンポジウムの企画者で、主催した日仏会館フランス国立日本研究センターの所長を今年八月まで務められたクリストフ・マルケさんと、第四セッションで司会・コメントーターを務めた尾久彰三さんに、シンポジウムの成果を改めてお聞きし、海外からの視野も含めた大津絵の魅力を語って頂いた。

◎初の国際シンポジウム

尾久 先日のシンポジウムは、若い研究者の発表がどれも興味深くて、素晴らしかったですね。国際的に大津絵を考えることは、これまであまりなかったんじゃないかな。

マルケ そうですね。ご存知のように、柳宗悦は一九三〇年にアメリカで大津絵コレクションの展覧会をして、その時に、アメリカの雑誌に英語の論文を発表していますが、外国人側からの研究は、これまであまりないと思いますね。

尾久 大津絵の研究は、一九二九(昭和四)年に刊行された柳宗悦の『初期大津絵』以降、補足がされる程度で、それを超えてさらに研究しようという研究者が出てこなかったんです。

マルケ 確かに、柳宗悦の著作以上はなかなか掘り下げられないですね。史料も、柳宗悦も大津絵考証の先駆としている山東京伝さんとうきょうでん(一七六一―一八一六)が書いた『近世奇跡考』の「大津絵考」などのほかは、ほとんど遺っていません。

尾久 柳さんは「今後は外国の人との交流の問題が残っているので、その辺をやるといいな」と書いています。まさにマルケさんがそのあとを引き継いだ感じですよ。

◎大津絵の絵画的魅力

マルケ 私は一九八九年から東京大学に留学して、洋画家の浅井忠あさいちゅう(一八五六―一九〇七)の研究をしました。浅井忠が大津絵をコレクションして、その画題を描いたりしているの、な



尾久彰三

1947年生まれ。元日本民藝館学芸部長。古民芸研究家。武蔵野美術大学非常勤講師。近著に『民芸とMingei』、『観じる民藝』ほか、著書多数。2005年に『大津絵 日本民藝館所蔵』を監修した。本誌に「旅と骨董」コラムを執筆中。

右：「鬼奴」江戸時代 秦秀雄旧蔵 個人蔵（パリ）
他に同種が見つかっていない画題。毛槍、二本差し、脚絆は大名行列の供先として歩く「槍持奴」の画題に類似する。「槍持奴」は大名の威を借りて威張る姿を諷刺しているとも解釈される。



が起こったのか、その時代背景を考えると面白いんです。これまではあまり言われたことがないですが、ブームのきっかけは、やはり外国との関係です。当時、浅井忠、梅原龍三郎（二八八八～一九八六）、山下新太郎（二八八一～一九六六）など、洋画家の大作の多くはフランスに留学しました。帰国後、大津絵を見て、フランスで見たマティスや後期印象派と共通する斬新さを感じたんです。

尾久 違う視点で見えるようになったんだね。マルケ 江戸期の古大津絵の展覧会が初めて開催されたのは明治の末、一九一二年、大阪の美術店「吾八」に於いてです。店主は日本画家でもある山内神斧（二八八六～一九六六）です。彼は洋画家とも交流があり、画家と大津絵を結びつけるきっかけになりました。この展覧会図録に、正岡子規の弟子の水落露石（一八七二～一九一九）が序文を寄稿していて、浅井忠を大

津絵のモダン性に着目した先駆者として紹介し、さらに大津絵とロダンのデッサンとの類似性が、留学した画家たちに指摘されていると記しています。

一九二六年に、初めて美術雑誌『デッサン』に大津絵が特集され、著名な人たちが寄稿しています。例えば、岡本太郎の父で、漫画家の岡本一平が大津絵展を見に行った感想を、近代的で素晴らしいものだと言っています。

◎大津絵と諷刺画
マルケ また重要な大津絵の特徴に諷刺があります。ヨーロッパも諷刺画が盛んで、フランス人も大好きです。留学した画家たちは、フランスで諷刺画をみて、大津絵的なものを感じ取ったのでしょうか。違う点は、ヨーロッパは政治に関する諷刺が多いこと。日本は人間に対する諷刺、教訓といったほうがいいかもしれません。

柳宗悦は「大津絵は決して原始的な絵画ではありません。そこには民衆の機智があるのです。恐らくかかる諸譚を含めた寓意の絵が当時の平民に許された社会批評の唯一の方便であったでせう」と書いています。これは素晴らしい言葉だと思います。恐らく大正デモクラシーの中で、江戸時代は自由がなかったと見たわけです。大津絵を通して庶民は自由を求めた。

尾久 大津絵は最初は仏画だったけど、それが教訓的な絵になって、人気が出たんでしょうね。マルケ もちろん初期の仏画は信仰の対象とし



クリストフ・マルケ

1965年フランス生まれ。フランス国立東洋言語文化大学（INALCO）教授。2011～2016年まで日仏会館フランス国立日本研究センター所長。専攻は日本近世・近代美術史と出版文化史。日本での編著に『日本の文字文化を探る 日仏の視点から』（勉誠出版）ほか。フランスで江戸・明治の画譜の翻訳復刻を多数出版。



左：「提灯釣鐘」江戸時代 浅井忠旧蔵 日本民藝館蔵〔大正時代蒐集〕

特別展「柳宗悦・蒐集の軌跡 -日本の工芸を中心に-」展示 ※9/1(木)～11/23(水・祝) 柳宗悦蒐集の大津絵約15点が展示されます。展覧会詳細 157頁

ぜ浅井忠がこんなに大津絵が好きだったのか、と思つて興味をもったんです。

尾久 以前、日本民藝館に浅井忠旧蔵の大津絵を観にいらつしましたね。

マルケ あの時は大変ご親切にして頂きまして。見せて頂いた浅井忠旧蔵の「提灯釣鐘」〔左図〕は亡くなるまで愛蔵した作品です。本当に構図が素晴らしい。こういう大津絵はこれ一点しかない。この絵に浅井忠が目をつけたのはやはり画家の眼だと思います。名品ですよ。

尾久 民藝館の大津絵でも抜群の一枚ですよ。マルケ 大津絵は天津・追分の宿場町の土産物で、浮世絵が出てくるまでは、庶民が唯一自分で買って楽しめる絵画でした。下河辺拾水の描いた「東海道名所図会」〔二七九七年〕には追分の大津絵店で絵師が描いて売っている様子が描かれています。

大津絵の愛好家は江戸時代からいて、所蔵者が大津絵に讀を書いたりしていて、その中には有名な文人画家もいます。文人画にも大津絵の画題が取り上げられていたりしています。絵画的魅力から愛好されていたと思いますが、何しろ文献史料が少ないですから、当時の人がどのような大津絵を見ていたかははっきりしません。

これまであまり研究されていない点として、川柳や俳諧、文学との関わりがあります。柳宗悦も文献を示してはいますが、解釈はあまりしていません。今回のシンポジウムでは、色々な角度から、大津絵について語って頂こうと、江戸文学の先生にも発表をお願いしました。

実践女子大学の佐藤悟さんが紹介していましたが、一八世紀末になると草双紙の中で大津絵が物語の対象になったりしています。大津絵は、多色摺りの「吾妻錦絵」が出てくると、人気が移ってあまり売れなくなる。そこで、大津絵の代表的な画題である「鬼の念仏」と「藤娘」が、浮世絵とはどんなものか江戸へ調査の旅にでる。そんな話を草双紙の戯作者が創作しています。それだけ民衆に普及していた大津絵が、一九世紀になつて下り坂になり、静かに消えてしまった。

尾久 当時はすごい数の大津絵があったと思いますよ。蒐集家が取捨選択して、出来がよくて、大事にされたものが残ったんだと思いますね。

◎明治以降の大津絵ブーム
マルケ 明治末、大正時代になぜ大津絵ブーム



左：「青面金剛」江戸時代
フランス・ギメ美術館蔵
梅原龍三郎寄贈
初期の仏画の画題のひとつ。民間
信仰の庚申待（こうしんまち）の
本尊として祀られたため、大津絵
仏画の中でも現存数が最も多い。



右：「鬼の念仏」
江戸時代 明和4年(1767)讀
梅原龍三郎旧蔵 個人蔵
形式的な善行をして偽善を成す
人への諷刺などいくつかの解釈
がある。子供の夜泣き止めなどの
効能があるとされた。大津絵の代
表的な画題として、店の看板にも
なっていた。

尾久 今、記録としてみれば、楠瀬日年の版画も意味があるし、面白いですよ。柳さんも、研究としてみれば、その価値を認めたんじゃないかな。ただ、当時は民藝を主導しないといけ

マルケ フランスの先史学者アンドレ・ルロワ「グレーラン（一九一〇～一九八六）」もそうですが、戦前に滞在して、大津絵をヨーロッパに持ち帰った彼らのような民芸愛好家によって、一部の研究者や芸術家に大津絵は知られるようになりました。パブロ・ピカソやジョアン・ミロもこうしたコレクターを通して大津絵を愛好するようになりました。バルセロナでは、一九五〇年に日本民芸展が開催されています（上写真）。パリでは、もう閉店してしまいましたが、五十年以上前に初めての「大津絵と泥絵」の展示会をしたギャラリーがありました。今でも「MINGEL」という店がパリの美術学校のすぐ側にあって、大津絵を少しだけ扱っています。

◎楠瀬日年の功績

梅原は、「自分のために、大津絵はよく学ぶべき手本である。マチスの画に大津絵に似た味があるが及ばない」と書いています。梅原はとも愛している大津絵を寄贈した。フランスはもつと大事にしないといけないと思います



上：「日本民芸展」会場のジョアン・ミロ



上：画家ジョアン・ミロ(右)と彫刻家エウダル・セーラ(左)が、1950年4月にバルセロナで開催された「日本民芸展」を訪れた時の写真。展覧会は1935～1948年まで滞日したセーラが手がけた。ジョアキム・ゴミスが撮影（個人蔵、バルセロナ）。セーラとゴミスが所有していた楠瀬日年の大津絵版画く竹に虎>を使用したポスターを背にしている。
左：「桃に鳩」江戸時代 個人蔵（バルセロナ）
山内神斧がエウダル・セーラに寄贈した大津絵。「桃に鳩」は礼儀と敬意を表す教訓的画題。

てのもですが、江戸中期の画題の多くは諷刺ですね。政治や社会に対するのではなく、人間の行動に対する諷刺です。「槍持奴（やりもちのやつ）」についても、柳宗悦は権力者の威を借りて威張る者に対する諷刺だといっています。

◎海外に伝わった大津絵

尾久 バルセロナ自治大学のリカル・ブルさんが発表した、ヨーロッパに大津絵を伝えたカタルーニャ人のエウダル・セーラ（一九一〇～二〇〇二）やセルソ・ゴミス（一九一二～二〇〇〇）も興味深いですね。
マルケ フランスの先史学者アンドレ・ルロワ「グレーラン（一九一〇～一九八六）」もそうですが、戦前に滞在して、大津絵をヨーロッパに持ち帰った彼らのような民芸愛好家によって、一部の研究者や芸術家に大津絵は知られるようになりました。パブロ・ピカソやジョアン・ミロもこうしたコレクターを通して大津絵を愛好するようになりました。バルセロナでは、一九五〇年に日本民芸展が開催されています（上写真）。パリでは、もう閉店してしまいましたが、五十年以上前に初めての「大津絵と泥絵」の展示会をしたギャラリーがありました。今でも「MINGEL」という店がパリの美術学校のすぐ側にあって、大津絵を少しだけ扱っています。

また、パリのギメ東洋美術館には梅原龍三郎旧蔵の「藤娘」と「青面金剛」（75頁左図）があります。梅原はギメに大津絵がないことを知って寄贈したんです。両方とも初期の名品で、フランスで一番いい大津絵といえるかもしれません。私は二〇〇九年にギメで大津絵についての講演会をした際に、この大津絵を五十年ぶりに展示するようにお願いしましたが、保存の問題のためにできなかったのが残念です。



②



①



⑤



④



③



クリストフ・マルケ著
『大津絵 民衆的諷刺の世界』
角川ソフィア文庫 2016年7月発行
定価：本体1400円（税別）
大津絵の歴史、楠瀬日年と大津絵について
の再発見の事実が盛り込まれた新知見
の研究書で有るとともに、楠瀬日年の版
画集『大津絵』による画題解説がわかり
やすい大津絵入門書。

フランスで発行され
たマルケ氏の著書
『Otsu-e : Imagerie
populaire du Japon』

尾久 ぜびやって下さい。楽しみにしています。

大津絵の歴史、楠瀬日年と大津絵について
の再発見の事実が盛り込まれた新知見
の研究書で有るとともに、楠瀬日年の版
画集『大津絵』による画題解説がわかり
やすい大津絵入門書。

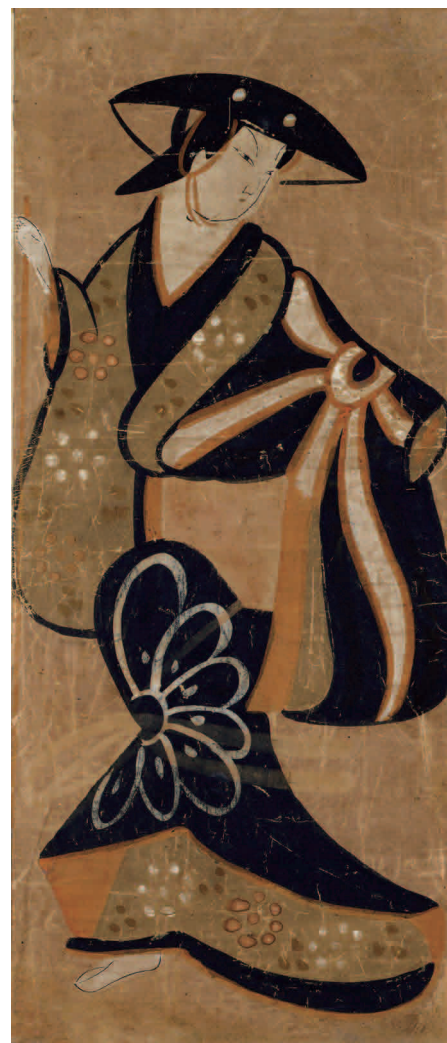
①浅井忠「鯉の演説」（『今様大津絵』
絵葉書）1905年

②浅井忠「陶器中皿図案大津絵」『黙
語図案集』芸艸堂 1908年

③小川千甕
「西洋風俗大津絵」1914年20画の内
荷物を運ぶパリのギャルソンを描いたも
の。大津絵の「釣鐘弁慶」の構図と共通す
る。写真左は楠瀬日年の版画にある「釣
鐘弁慶」。クリストフ・マルケ氏『Otsu-e :
Imagerie populaire du Japon』より比較。

④小川千甕
「西洋風俗大津絵」1914年20画の内
南イタリアの飾り馬を描いた一枚。大津絵
の神馬を意識していると考えられる。

⑤楠瀬日年『大津絵』版画集「鬼の廻国」
楠瀬の版画集にある他は、18世紀初頭の
大津絵の絵俳書『大津 追和気』に一例が
あるのみで、肉筆大津絵の現存は確認され
ていない。



左：塗笠美人 江戸
時代 ウゲット・ペ
レス（パリ）旧蔵
個人蔵
「踊娘」ともいわれる。

右：座頭 江戸時代
個人蔵（パリ）
表装が大津絵に登場す
る画題尽くしになって
いる。

©大津絵と近代の創作活動

マルケ 大正から昭和初めまで、古い大津絵を
蒐めて展示する民藝運動と、創作大津絵で愉し
むという、二つの流れがありました。浅井忠は
巻煙草の箱や皿、絵葉書のデザインに大津絵の
画題を採用しています（77頁①②）。浅井忠は四十
代になってからフランスにいつて洋画を学ん
で、日本人が全く同じものをしようとするのは
無理だと、日本に合った絵画を目指して、大津
絵に着目しました。日本の風土、感性にあった
絵画を模索したことは素晴らしいと思います。

尾久 シンポジウムで京都文化博物館の植田彩
芳子さんが紹介した小川千甕の作品（77頁③④）
もとても素晴らしかった。これだったら柳さん
は激賞したと思うんですけどね。

マルケ 聖護院洋画研究所で浅井忠に学んだ一
人が小川千甕（一八八二〜一九七二）です。第一
次世界大戦の直前に留学して見聞した西洋の風
物を大津絵風に描いています。大津絵がどんな
風に近代とつながったのか、という流れがわか
ります。

尾久 マルケさんが出された大津絵の本では、
楠瀬日年の版画で大津絵を紹介していますね。
マルケ フランスでは、大津絵はほとんど認識

なかったから、本物にこだわったんでしょ。う。
マルケ 柳宗悦の時代はまだまだ大津絵を蒐め
られる時代だったから、本物主義なんですよ。ね。
楠瀬日年は創作する側だった。